

## 「JENESYS2.0」中国大学生訪日団第13陣

### 参加者の感想（抜粋）

○ 日本の大学のボランティア活動は中国の大学と多くの類似点があり、参考となるところが多かった。日本ではコミュニティ意識が強く、どのようなボランティア活動でも、まず自分の身近な所から始めている。このような方法は非常に効果的だ。コミュニティの改善に貢献することで、社会の人々にボランティアへの参加を呼びかけることができ、とても影響力があると思う。

○ 1週間の訪日はすべてが印象深いものだったが、「最も印象深いもの」と言えば団長が私達に話してくれたことだ。愛媛大学を訪問し、全員で『北京歓迎你（北京へようこそ）』を大合唱した時、前の方に座っていた日本人達が感動して涙を流し、「中日両国はこのように友好関係であるべきだ」と語ったという。多くの文化的な共通点を持ち、海峡一つ隔てただけの距離にあり、多くの人達が両国の平和共存を願っているのに、どうして争う必要があるのだろうか？ どうして政治的な判断を民衆に押しつけるのか？

私は日本で得られた感動や友情を友達に伝えたいと思う。そして日本人達にも中国の友情と熱意を感じてほしい。私達が両国の友好の絆となって、この貴重な友情を永遠に伝えていきたい。

○ 今回のテーマはボランティア活動で、セミナーを聴講し、現地でシニアや学生のボランティア達と交流を行い、ボランティア団体の管理や運営ノウハウを学んだ。また、ボランティアの研修や分担など、共通の課題も存在していることがわかった。

ボランティアは継続して活動しなければならないが、この点において中国は強化が必要である。しかし、私が知り合った多くのボランティアは、理想を持って熱心に活動に取り組んでいるので、ボランティア活動には期待できると思う。

○ 今回の訪問で最も印象に残ったのは、日本人の礼儀正しさ、そして国全体でマナーが守られているということだ。

日本の街を歩いていると、前の方から歩いてくる日本人が微笑んでくれる。お店で買い物をする時、店員達が挨拶をしてくれる。街にはゴミがなく、歩行者は信号を守り、左側に寄って歩く。こうした些細なことがとても印象深く感じられた。

帰国したら、日本は清潔で整然とした国であり、日本人は礼儀正しく親しみやすい人達であることを友達に伝えたい。

○ 「地域を紡ぐボランティア活動」のセミナーは非常に印象深く、知識を得、視野を広げることができた。紹介されたボランティア活動には中国に既存のものも、まだ存在しないものもあったが、それぞれに欠点が存在することがわかった。また、一人の力には限りがあるが、インターネット等を利用して個々の力を結びつければ、より大きな力になるのだという結論も得られた。

○ 今回の訪日で最も感動したのは、大東文化大学と愛媛大学での交流だった。私達の間には争うような利益はない。皆、この世界の未来の一部である。互いの間にあるのは誠意、熱意、良心のみで、同じように無限の希望に満ちている。

今も昔も日本に対して偏見を持っている中国人はまだいるだろう。でも、日本には私達が学ぶ価値のあるものが多い。環境は政府の責任ではなく、すべての国民の義務である。両国の間にはいつか真っ青な空が広がるだろう。

○ 私は日本語専攻の学生であり、わずか8日間の日本滞在だったが、毎日、本場の日本語をたくさん聞いて、日本語レベルが向上した。

大東文化大学と愛媛大学の訪問では、日本の私立大学と公立大学の教育事情について理解し、友達をつくることができた。これは縁であり、また貴重な友情でもあり、自分を鍛える機会になった。

鎌倉の見学とシニアボランティアとの交流、道後での温泉文化体験、そして皇居二重橋、三菱みなとみらい技術館、内子座の見学等を通じて、日本の文化、伝統、技術、工芸、風習等、全体像をつかむことができた。

ボランティア活動に関するセミナーにおいても、専門的で正確な新しい認識を得ることができた。

○ 今回の交流活動のテーマであるボランティアを切り口に、社会を観察し、現地の人々と交流することで、多くの収穫を得ることができた。

二つの大学を訪問し、大学生と交流する中で、日本の青少年は中国の同年代と非常に多くの共通点があり、同じように将来に対して憧れと戸惑いを懐き、夢と情熱に満ちあふれていることがわかった。この年代は人生観や価値観が形成されていく時期だと思う。中日両国の青少年が成長の過程において、寛容な心で理解する精神を養い、視野を広げ、広い心を持ち、思考と問題解決の能力を高め、理性を保つことができれば、中日関係は更に発展するのではないかと思う。

○ 社会学専攻の学生として、ボランティアに関する交流は大いに感じる場所があった。計3回の講義の中で、日本のボランティア活動が系統的に行われていることがわかった。とりわけシニアボランティアの活動において、それを感じた。鎌倉を見学した際、シニアボランティアはとても元気で、退職した後にガイドの資格をとり、現地でボランティアガイドをしている。学生達のボランティア活動は言うまでもない。

ボランティア従事者をどのようにより専門的に育成するかなど、中日両国においてボランティアの抱えている課題は大体同じだと思う。すなわち、いかに知識や専門性の限界を打破していくかといった、ボランティア活動の方法や心構えだ。長期的な観点から見れば、両国の友好発展はボランティア活動の交流から強化できると言っていいたいだろう。

○ 日本人の私達に対する親切、手抜きなく懸命に物事を行う精神、廃棄物のリサイクル利用等、参考にすべきところがたくさんあった。また、日本ではシニア層が熱心にボランティア活動に参加しているが、中国ではそんなことはない。中国のシニア層は娯

楽活動に熱心で、しかし楽しんでも得られるものが少ないため、退屈に感じている。

私は中日両国が改めて友好関係を築けることを願っている。愛媛県立とべ動物園を訪問した際、NPO 法人園でピースの代表が 20 年前の中国のチーパオを着て、中日関係の悪化が続かないよう願っていると語ったことに、とても感動した。

○ 日本に 8 日間滞在する中で、大東文化大学と愛媛大学を訪問した。大学のキャンパスは美しく、学生たちも親切でフレンドリーに私達に対応してくれた。大東文化大学では、日本の学生達と一緒にゲームやキャンパス見学をした。愛媛大学では、珍しい昆虫の標本や文化財を見学し、それぞれのボランティア活動について話し合った。最後には、互いの連絡先を交換したので、今後も交流を続けていきたい。青少年は国の発展の未来であり、日本と中国の青少年が友情を深めることで、平和共存の礎を築くことができる。短い時間だったが、交流を通じて友情を育むことができた。

○ 今回の活動テーマはボランティア交流で、訪問期間中、日本のボランティア活動に関する多くの情報を得ることができた。全体として感じたことは、日本のボランティア活動は組織形態が多様で、参加率が高いということだ。地方行政や NPO 団体がボランティア活動を盛んにするために努力をし、地域全体の活動がうまく展開されている。これもまた日本でボランティア活動の普及率が高い理由の一つだと思った。また、日本の大学生との交流を通じて、キャンパス内のボランティア活動が盛んだということもわかった。特に、愛媛大学でのボランティア団体の紹介は印象的だった。活動形態の多くはまだ私達が試みたことのないものであり、我が校のボランティア団体の発展に役立つと思う。

○ 最も印象深かったのは、日本の風土、人情、景色、すべてが日本らしい特色に溢れていたことだ。中国の伝統文化や名所旧跡は、その多くが十分に保存されておらず、一部の観光地を除き、大多数の地方都市の景観や人々の生活習慣にさほど大きな違いはない。しかし、日本では、伝統文化がよく保存されており、自信を持って外国人に紹介している。また、鎌倉を見学した時、街全体に日本らしさが溢れ、日本の魅力を十分に感じた。中国にも優れた文化はたくさんあるが、文化の継承、保護、発展はうまくいっておらず、自分達の文化に誇りを持たない中国人も多い。日本にならって、自分たちの文化を発展させ、中国の特色を打ち出すことが大切であることを、中国の人達に伝えたい。

○ 中国のシニア層はもっと積極的に公益事業に参加し、社会のために貢献すべきだと思った。日本の青少年も中国の伝統文化を勉強しているので、中国の大学生として更に広い視野を持ち、中国の友好の使者になりたい。

○ 今回の活動テーマはボランティア活動で、1 日目のセミナーはとても印象深く、ボランティアの目的がいったい何なのか、考えさせられた。大東文化大学と愛媛大学での交流では、中国とは違うボランティア活動や団体について知ることができた。しかし、日本の大学と中国の大学とでは状況が異なっており、私達には長期間ボランティア活動

の対象者と一緒に過ごす機会がないため、ボランティア活動をどうやって継続していくかが難しい。今回の活動を通じて、自分がボランティアを始めた当初の志を思い出した。是非継続していきたい。

○ 飛行機を降りて東京へ到着した1日目から、日本人の礼儀正しさと細部まで行き届いたもてなしを体感した。最初に顔を合わせた時のお辞儀や挨拶から行程全体の手配に至るまで、そして、三つのバスのグループ分け、旅のしおりや名札の作成等、日本の特徴であるきめ細やかさを感じた。

東京での2日目。青い空と緑の木々、清潔な街、秩序正しく行き交う歩行者や車に目を奪われた。適当にカメラのシャッターを押しても、美しい写真が撮れそう。印象深かったのはシニアボランティアとの交流だ。中国では60～70歳のシニア層はほとんどが家で静かに晩年を過ごす。しかし、日本のシニア層は、心が若いだけでなく体も健康で、ボランティア活動を「第二の人生」としている。このことに私は感動した。高齢になっても社会に貢献することを忘れず、他人のために働く。これこそボランティア精神であり、学ぶべきだと思う。

井関松山製造所や三菱みなとみらい技術館の見学では、日本の科学技術の発展を理解することができた。帰国したら、日本社会の現状や生活の様子、美しい環境以外に飛躍的に発展した科学技術や文化があること、更には礼儀を重んじること等を周囲の人達に伝えたい。

日本滞在は毎日が驚きと喜びであり、新しい発見と体験の連続だった。この驚きと喜びに満ちた国を離れるのは残念だが、是非また日本を訪れたい。

○ 大学1年生から学校のボランティア活動に参加している学生幹部の一人として、またさまざまな規模の活動に何度も参加したボランティアとして、日本人、特に日本の大学生とボランティア活動に関する交流を行うことができ、とても嬉しく思っている。山崎美貴子先生のセミナーや愛媛大学の学生ボランティアとの交流を通じて、中国と日本のボランティア活動には、組織の形態、インセンティブの方法、活動のモデル、宣伝方法等、異なるところがたくさんあることがわかった。今後のボランティア活動において、こうした考え方を参考にし、良いところを取り入れて改善し、私達のボランティア活動をより充実させて参加者を増やしたい。

○ 今回の訪問で最も印象深かったのは、日本の企業の管理メカニズムだ。井関松山製造所を見学した時、工場の中はとても清潔だった。トラクターの製造に高効率、高品質な管理メカニズムを導入することで、その製品も高品質、高効率なものとなっている。また、従業員の特性を考え、最大限に人的資源を利用する。このような管理メカニズムは学ぶに値するものであり、かつ従業員が会社に意見を出せる環境があることで、会社は発展し続けることができるのだ。また、日本は科学技術を重視し、子供達に学ばせようと努力している。ハイテク技術は国の各方面において非常に重要であり、あらゆる面で最高の境地を求める日本人の特性により、科学技術も安定した発展を遂げている。子供達に科学技術を理解させ、興味を持たせることは、新たな科学技術の人材を育成する

のにとっても重要だ。

帰国後は、日本の科学技術の発展と国民性を周囲に伝え、日本人の日常生活の細部や日本人の友情、日本の企業管理、科学技術発展の方向性などについて紹介したい。

○ 私は大学1年生から多くのボランティア活動を行い、大学の青年ボランティア連合会の幹事も務めている。今回の訪日ではボランティア活動に関するさまざまな経験に触れることができた。例えば、全ての人々にボランティア活動への参加を呼びかけ、社会に対する共通の願いを持つようにし、幼稚園や公立学校にボランティア団体のチラシや月刊誌を配布していることだ。また、私が参加しているボランティア活動ではいかにしてボランティアにインセンティブを与えるかが課題だが、愛媛県が行っている地域通貨「いーよ」は大いに参考となった。公益活動に参加することでバーチャル通貨を受け取ることができ、それに応じたサービスや物と交換できる。これはビットコインに似た新しい通貨だ。そして、愛媛の「住民集会」もすばらしいと思った。会議を開いて皆の意見を聞くのだが、ボランティアについても、集会を行って皆の意見を聞くことができる。その他に、専用のボランティアネットを作るのもよいアイデアだ。ボランティア活動は新しいメディアを利用する必要がある。メディアが情報を集めて発信すれば、これを見るだけで活動の様子がわかる。また、ボランティアネットが個人情報のプライバシーを重視・保護している点もすばらしいと思った。

大学訪問で興味を持ったのはキャンパスのレイアウトだ。学生と先生の相談室等、リラックスした自由な雰囲気交流できる。学生は比較的自立しており、積極的にアルバイトやサークル活動を行っていた。

○ 私はビジネス日本語専攻なので、大学でも日本の飲食文化や歴史等、さまざまな授業を受けている。今回のボランティア活動の交流を通じて、日本の大学生と知り合ったが、皆とてもフレンドリーで、中には中国語が非常に上手な学生もいた。交流の際、言いたいことがうまく伝わらない時もあったが、一生懸命聞いてくれ、言葉が伝わらない苦しみを笑顔で和らげてくれた。キャンパス見学では大学らしい雰囲気を十分に感じることができた。こういうキャンパスライフに憧れる。私は日本、そして日本人が好きだ。もっと交流して、一緒にボランティア活動を行いたい。

○ 最も印象深かったのは“人”である。スタッフは一生懸命やってくれたし、信号のない通りで車に先を譲ると、ドライバーは窓ガラスを下げて礼を言う。路上で人通りが少ない時に日本人と目が合えば、向こうから挨拶してくれる。車のドライバーは荷物の運搬をする時も注意を怠らない。バスのドライバーも私達が乗り降りする時、一人一人に挨拶してくれる。ホテルのスタッフも同様。これらは北京ではほとんど見られない光景だ。もう一つ印象に残ったのは“安全”である。道中見かけた多くの住宅は他人が勝手に入り込めそうで、門を開けっ放しにしている家も多かった。火災や地震の予防という点でも、行政の配慮が伺えた。また、私達自身も日本の学生や動物園のスタッフ、ボランティアの人達が中国に対して友好的であることを感じた。日本人の態度や精神に触れ、自分に謙虚になり、人を尊敬すべきだと思った。

帰国後は、盲目的に愛国精神の影響を受けるのではなく、実際に現地に行って体験しなければ評価できない、ということを周りに伝えたい。自国を出て初めて、自分達に不足しているものが見えてくるのだ。